十二支の恋人　ねずみ編

今西　克己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十二支の恋人　ねずみ編

【Ｎコード】
Ｎ６０２９Ｔ

【作者名】
今西　克己

【あらすじ】
幼馴染の子の渾名はネズミ。近すぎる二人は高校生になった。何時までも昔のようにいられると思っていたのに……

幼馴染

「お兄ちゃん、朝だよ」
一ノ瀬秀一は気持ち良い眠りから覚めさせられた。
「起きてよ。お兄ちゃん」
「はいはい……」
秀一は重たい瞼を開き、声をかける少女を視界の中心へ据える。
根津美奈子――それがその少女の名で渾名はネズミ。丸みを帯びた輪郭にクリっとした大きな黒い瞳、黒髪のショート、顔立ちはまさしくキュートの一言で人受けが良くウチの両親も美奈子を大層気に入っている。
「あのさ、起こしに来なくていいだろう。俺は一人で起きられるから」
「だって朝食をお世話になるんですもの。これくらいしないと」
彼女の両親は海外旅行に出かけていて、ウチの母親は美奈子の面倒を見ると約束をしている。
「ねえ、制服似合ってる？」
美奈子はくるりと一回転して腰に手を当て秀一に訊いてきた。彼女の入学式は昨日だったので制服姿を見るのは二回目、昨日も適当に褒めておいたのにまた感想を求める。
（だいたい入学式の次の日に旅行に出かけるなよ）
「可愛いよ、可愛い」
「ぜんぜん気持ちが入ってない」
「なんて言えばいいんだよ」
「綺麗とか、清楚とかあるでしょう」
「お前には当てはまらない」
「ひっどーい」
ホッペタをぷっくりと膨らませるその行動は高一にしては幼い。
一人っ子で可愛いから甘やかされてきたのが自明だ。

「朝飯先に食ってこい。俺は着替えてから行く」
……美奈子はベッドの脇を離れない。
「着替えるって言ってるだろ。部屋を出て行けよ」
「恥ずかしいんだ」
「あのな。お前と俺はどれだけの付き合いなんだよ。恥ずかしくなんかねえよ」
そうは言いつつ男の生理現象とは悲しく彼の愚息は朝立ちをしていた。
「ベッドは私が綺麗にしてあげる」
美奈子が勢い良く掛け布団を剥ぐと秀一のズボンの怒張が目に止まった。
「ご……ごめん」
固まった空気の中、彼女は顔を紅潮させそそくさと部屋から出て行く。
「こ、これはあくまで生理現象だからな」
美奈子の背中には届いたかもしれないが耳には入ってないかもしれない。秀一は気まずさを胸に引っ掛け、服に着替え食卓へと行くと美奈子は黙々と朝食を胃に入れている。もぐもぐと咀嚼する姿は渾名のとおりネズミのようで妙な可愛さがある。
向かいに座っている秀一が微笑ましく眺めていると目が合ってしまった。
「なに？」
「うん、いやなんでもないよ」
「遅刻しちゃうよ。お兄ちゃん早く食べなきゃ」
「秀一はもう少し早く起きたらどういいのにね」
母親の正論には言い返す言葉が浮かばない。
「はーい」
取り敢えず返事をしておく。
「ごちそうさまでした」
美奈子は先に食べ終わり食器を下げる。とろいやつなのに食べる

のだけはなんとも早い。
「おばさんの料理はいつも最高です」
「あら、ありがとう」
母は満更でもなさそうだ。いや、簡単な朝食ですから、俺でもこれくらいは出来るから……秀一は口には出さずツッコミを入れた。でも美奈子には打算とか媚を売るとか出来ない天然少女だから本音なんだろう。
「いってきます」
「いってきますわ」
「いってらっしゃーい」
玄関をでると美奈子は腕を組んでくる。
「こら、ネズミ調子に乗るな」
「なんで？　いままでそんな事言わなかったのに。急にどうしたの？」
「お前はもう高校生だろう」
「だから何？」
「俺とお前は奇しくも同じ学校な訳だ。俺とお前を見て他の同級生たちはなんと思う」
「恋人同士かな」
「分かっているのなら宜しい」
秀一は組んでいた手を離した。そしてそのままツカツカと早足で歩いて行くが美奈子は懸命についてくる。秀一は諦め
「腕組むのは禁止な」
と注意をして早足を止め美奈子と並んで登校することにした。新興住宅街に新設された学校は家から徒歩十五分の所にある。
「一ノ瀬、彼女と登校か？」
背後からの声に振り返ると中学時代からの悪友・島村隆が自転車を押している。
「違うよ。ネズミだよ」

「ネズミ？」
島村は美奈子の顔を覗き込むとパッと目を見開いた。
「美奈子ちゃん、久し振り。俺のこと覚えてる？」
美奈子は秀一の方に瞳を向ける。
（こいつ、忘れてるな）
秀一は美奈子が島村を忘れていることに気づき、思い出させるために二、三会話でもするかと考えた。
「隆、お前ネズミとどれくらい会ってないっけ？」
「三年は会ってないな。お前の家によく行くのに不思議だな」
「一緒にプールに行ったよな。あれ以来か」
一瞬だけ美奈子に目を送る。思い出して……なさそうだ。
「おい、あそこにいるのは進藤さんじゃないか」
秀一は話題を逸らすことにした。島村はいま進藤恭子に狙いを定めている。彼女は今日も一人で登校だ。ストレートのロングの黒髪は美しく肌は透けるような色白で切れ長の目は赤い縁の眼鏡で直射日光を避けている。その清楚な知的さは大人びた雰囲気を帯びており近寄り難さを秀一は感じている。秀一が知っているだけでも六人の男が彼女に告白をして撃沈している。近々島村が七人目の男になるだろう。
「あっ、ほんとだ。秀一お先に」
島村は自転車を漕ぎ進藤の元に行って何やら話しかけている。笑顔の島村とは反対に進藤は無表情にぽつりぽつりと短い言葉を返している。
「ネズミ、思い出せないか？　島村隆だよ」
「思い出した！　飛び込みの人だ」
「そうだ」
三人でプールに行った日、島村は美奈子にいいところを見せようと高さ十メートルの飛び込み台から飛び降りたが恐怖心からカエルみたいなガニ股でお腹から飛び込んでしまい上がってきたときにはお腹が真っ赤に変色していた。それを見て秀一と美奈子は爆笑し、

かっこ良いいところを見せるつもりだった隆は引きつった笑いを浮かべた。
「なんか変わったね。大人っぽい」
「あれは三年前だからな」
「ねえ、私はどう？　三年で大人っぽくなったかな？」
「変わらないな」
毎日顔を合わせると変化に疎くなるもんだ。写真で見比べて見れば美奈子も大人っぽくは成っているとは思うのだろうが。
「じゃあ私、可愛い？」
「可愛い、可愛い」
これは昔からのお約束のやり取りだ。秀一がある有名な音楽家の子供の頃の口癖が『ねえ、僕の事好き』だったと美奈子に蘊蓄をたれたとき美奈子は冗談めかして『私可愛い？』と訊いてきた。秀一はそれにのって『可愛い、可愛い』と答え、以後それが二人のお約束となった。
「お兄ちゃん、一つお願いがあるんだけど」
「なに？」
「私のことネズミって言うのやめてよ。私は『ず』じゃなくて『づ』だから」
今さらそこかよと思いつつ確かに女子高生にネズミはないなとは思う。
「そうだな。なんて呼ぶのがいい？」
「そう言われると……」
学校はもう目の前に迫っていた。
「帰りまでに考えとくから、それとお前は先輩と呼ぶようにしろよ」
校門をくぐると目の前には白い四階建て校舎がそびえ立ち三年生の靴箱は正面で一年生の靴箱は回ったところにある。Ｉ字型の校舎が主に教室で、渡り廊下で繋がっているＬ字型の校舎に職員室や図書室、音楽室、視聴覚室などがある。
「じゃあ、帰りに教室に来るね」

「一緒に帰るのか？」
「えっ、帰らないの？」
（まだ一緒に下校する友人は出来ていないか。実質今日が初登校だもんな）
「部活には入らないのか？　入学式の日、部活紹介有っただろ」
「興味があるのがなかったの」
「そうか、お前は何組だっけ」
「１０組だよ」
「それなら二階だな。俺は３組だから三階だ」
「うん、先に終わったほうが来るんだね」
秀一と美奈子はその約束を交わしてから別れた。

教室に入ると秀一の机の横で隆が左手を机上について右手を腰に当て待っていたとばかりにこっちに目を向けてくる。
「隆、進藤さんはどうだった」
「駄目、脈なし……」
「進藤さんは男嫌いなのかな。誰とも付き合ってないよな」
二人して最前列の左から二番目の席に座り文庫本を読む耽っている進藤に視線をやる。陽光浴びた髪はやや茶色がかりツヤツヤと輝いている。
「秀一は進藤さんのことどう想ってるんだ？」
「いや、なんとも。綺麗だとは思うが俺の趣味じゃない」
「秀一には美奈子ちゃんがいるからな」
「あんなネズミ異性とは見れないよ。妹だよ妹」
「ふーん、そうなのか」
島村は右手で顎をさすり視線を床に向けなにやら思い巡らせている。
「……なあ秀一、美奈子ちゃんと俺の仲を取り持ってくれないか？」
「なっ？　お前、まじか？　あいつと付き合いたいのか？」
「美奈子ちゃんは普通に可愛いだろ」

（美奈子が男と付き合う？）
秀一は胸がむずむずとしてきた。これまでそんなこと一度も想像したことはないが美奈子とて高校生だ彼氏がいても驚くことでもない。
「取り持つって、俺はどうすればいいんだよ。美奈子はお前知ってるしお前が直接告白すればいい」
「こう、なんというか。俺の魅力というか、そんなところを美奈子ちゃんに伝えといてくれれば俺の印象が良くなるだろう」
「さっきプールの時のこと言ってたぞ」
「あれは、まずった」
島村にとっては黒歴史だ。痛いわ、笑われるわ散々だった記憶が鮮明によみがえる。
「告白するのは構わないんだな」
「なんで俺が気にする必要がある？」
「そうなら別にいいや。近いうちに告白するからそん時は助けになってくれるよな」
「勿論さ」
島村は自分の教室へと帰っていく。どうせ休み時間にはまた来る。秀一は何の気なしに艶めいていた進藤の髪を見ようと彼女に視線を送ると彼女と目が合った。
「！！」
秀一はパッと目を逸らす。
（進藤が自分を見ていた。そんなハズはないたまたまだたまたま……ん？　俺動揺している？　なんでだ？）
数秒、窓の外を眺め進藤をちらりと見ると彼女は文字を目で追っていた。秀一は意識しすぎていた自分が気恥ずかしくなる。ほんのかすかにへこんでいると始業ベルが鳴り先生が教室に入ってきた。
六時限目、掃除、ホームルームと来て今日も学校から解放された。さっさと教室を出ると美奈子が既に待っていた。

「お兄ちゃん、帰ろう」
「先輩と呼べよ」
「そうだったね」
はにかんだ笑顔を秀一に見せる。クラスメートは秀一と美奈子を恋人同士だと思っているかのようにちらりとだけ見て靴箱や部活へと向かう。
「一ノ瀬君、さようなら」
その中で唯一、この二人に声をかけてきたのは意外なことに進藤恭子だった。いつもは挨拶すら交わすことはないのに珍しいことがあるものだ。
「進藤さん、さよなら」
「一ノ瀬君、彼女いたんだ」
「彼女じゃなくて、幼馴染の子なんだ。新一年生」
「可愛いわね。私は進藤恭子といいますよろしくね」
「進藤先輩ですね。私は根津美奈子です。こちらこそよろしくお願いします」
美奈子は頭を下げる。進藤が話しかけてくるなんて滅多にない事だ。一年生の頃から同じクラスであったのだが会話をした記憶はさほどない。
「根津さんは一ノ瀬君のことお兄ちゃんと呼んでるの？」
「先輩と呼ぶように今日の朝注意しておいたんだけどね」
「いいじゃない、好きな呼び方で呼ばせてあげなさいよ。慣れた呼び方が一番よ」
「でも、学校でお兄ちゃんは恥ずかしいよ」
「そうかな？」
笑みをたたえる進藤はやはり別格の美しさだ。秀一の好みではないがもてるのは理解できる。
「根津さんの意見を聞きたいわ」
「私はお兄ちゃんが言いやすいです」
「ほら、お兄ちゃんがいいですって」

「分かったよ。お兄ちゃんでいいよ」
「じゃあ、私は生徒会がありますから失礼しますね」
進藤は向き直って生徒会室に足を進める。何をしたかったのだか。
進藤の目的を読むことが出来ない。
「お兄ちゃん嬉しそうだね」
ギクリ。
「そんなことはない。進藤さんは俺の好みじゃないよ」
「やけに表情が緩んでたよ」
「気のせいだよ」
「進藤さんの言うことはあっさりと聞くんだ」
胸が針で突いたようにチクチクとする。
（俺はもしかして進藤のこと好きなのかな？）
しかし、そうとは思えない。適当な表現が見つけられず、もどかしい心のしこりが残る。
「帰ろうか？」
「うん」
二人は三年ぶりに並んで帰途につく。ちなみに美奈子の新しい呼び方はなんの捻りなく『美奈子ちゃん』にした。今さら苗字で呼ぶのは余所余所しすぎるし彼氏でもないのに呼び捨てはまずいだろうと。
『ネズミ』は確かに酷過ぎるネーミングだったと秀一は反省している。

告白

「秀一、美奈子ちゃんが来たわよ」
ヘッドホンをして音楽を聴いている秀一の耳には声が届いていない。
「お兄ちゃん」
ポンと肩を叩かれビクリと身体が反応し振り返ると制服姿の美奈子がそこにいた。
「びっくりした？」
「ノックくらいしろよ」
「したけど」
「男の部屋に無用心に入るもんじゃないだろ」
いかがわしいことをしている現場を押さえられたら美奈子には頭が上がらなくなる。
「私のこと女として意識してるんだ」
「それはない。全くない」
「お世辞くらい言ってよ」
「はいはい、可愛いかわいい」
「何かというとそればっかり」
美奈子はベッドに腰をおろす。絨毯に座っている秀一は美奈子を見上げる事になり、目の前には脚があってスカートの中が見えそうになる。秀一はテレビをつけ面白くもない情報番組を漫然を眺める。
「何しに来たんだ？」
「うん……」
美奈子は用件を言わず時計の針が進む。
「美奈子ちゃん。お茶入れたわよ」
黙っている二人の空間にお盆に湯のみを二つ乗せた母親が部屋に入ってきた。
「美奈子ちゃん。男には気を付けないといけないわよ。油断したら

だめだからね」
「母さん、自分の息子くらい信じろよ。美奈子ちゃんには何もしないよ」
秀一ははっきりと断言する。
「母さんは美奈子ちゃんなら仲良く出来るわよ」
「妹みたいなものだろ。そんな気起きないよ」
「えっ！　だって秀一は女子高生の格好をしたヌード雑誌ベッドに下に隠してあるわよね」
（おーい）
隠し通せると思ってるの？　とでも言わんばかりにニヤニヤしている。
「じゃあ、私はお失礼するわね。青少年」
お盆を脇に抱え去っていく。掛ける言葉はかけらも浮かばない。
美奈子は少し表情が硬い。
（ほら、ドン引きした）
「安心しろ。俺はお前を女としては見てないから」
「……それも辛いよ」
いつもの元気は何処か遠くに買い物にでも行ったのか、目が暗い。
「何があったんだ。俺に相談しに来たんだろ」
「うん、実はね……私、告白されちゃった」
「へえ」（隆のやつ以外に早く行動に出たものだ）
「それでね。その、こんな事初めてだからどうしたらいいのかなって」
「もてない俺には難しい相談だな」
「お兄ちゃん、かっこいいよ！」
自虐のギャグで行ったつもりなのにそこまで食いつかれると哀しくなる。
「それで、美奈子ちゃんの気持ちはどうなんだ。ごめん。ちゃん付けは呼びづらいわ」
「呼び捨てでいいよお兄ちゃん。好きでもないし嫌いでもないの。

だってよく知らない人だもの」
「知らないからこそ付き合うんじゃないかな」
「そうだけど……相手のこととかお兄ちゃん聞かないんだね」
「それは野暮ってものだろ。聞いて欲しいのか？」
「ううん」
美奈子は首を振る。ポッチャリとはしているのに脚は意外に細い。黒のニーソに包まれた脚を見て秀一は思った。
「あのさ美奈子、ベッドから降りたほうがいいぞ」
「どうして」
「お前はスカートはいてるだろう。見えそうなんだよ」
「サービスだよ。おかずって言うんでしょそれにしてもいいよ」
美奈子が下ネタを言うとは正直驚いた。でも考えて見れば秀一だって中学時代からその手の話は友人としていたし、そういう事は女の子のほうがませているともいう。
「残念、俺は年上好きだ」
「さっきおばさんが言った雑誌は？」
一本取られてしまった。
「まあ、なんだ本題に戻るとしよう。人生経験だと思って付き合ってみればいいんじゃないか」
（隆よ、俺はアシストをしてやったぞ）
「うん……」
「乗り気じゃないんだな。取り敢えず付き合ってみろよ。駄目なら別れたらいいんだし」
「そう……しようかな」
「俺は応援するから」
「うん」
美奈子は吹っ切れない顔をして、少し冷め飲みやすくなったお茶をすする。
「それからね、お兄ちゃん。これ」
美奈子はメモ用紙をスカートのポケットから出した。秀一が受け

取ると紙には数字が列挙してある。恐らくはというか絶対携帯番号だ。
「クラスメートの楠さんがお兄ちゃんに渡しておいてって私に預けてきたの」
「どんな娘？」
「大人しくて清楚な子だよ。明日、お兄ちゃんのクラスに連れて来るね」
「俺は電話した方がいいのか？」
「どうだろう、私には分からない。じゃあ私帰るねお兄ちゃんありがとう」
「どういたしまして」
美奈子が帰った後、秀一はベッドに仰向けになり暫くメモの数字とにらめっこしていたが顔も知らない娘に電話は止めておこうという極めて無難な結論に落ち着き、そのメモを机の一番上の引き出しにしまった。

翌日
登校すると隆が秀一の机に座って待っていた。
「社長、お早いお着きで」
「うむ、温めておいてくれてありがとう」
隆は椅子から立ち入れ替わりに秀一が座る。
「隆、お前手が早いな。進藤さんはもう諦めたのか？」
「何いってるんだ？　まだ俺は散っていないぜ」
「俺は何でも知ってるんだぜ。お前、美奈子にコクッたんだろ。証拠は上がってるんだ」
「マジで何のことだかわからないんだが」
「美奈子に告白してないのか？」
「ああ、お前に嘘ついてどうなる」
確かに隆が秀一に嘘を付く必要はない。隆が隠している演技をしているふうにも見えない

（もしかして俺は勘違いをしているのか？　だとしたら美奈子に告白をしたのは誰だ？）
脳で検索しても候補は浮かばない。俺の知らない人なのだろうと秀一は考えた。アシストは滑ったようだ。
「お兄ちゃん」
廊下から美奈子の声が聞こえる。そういえば楠さんという娘に会わせてくれる約束だった。秀一が隆を残して廊下に出ると美奈子の隣に縁なしの眼鏡をかけたおとなしそうな娘が伏し目がちに並んでいた。
「お兄ちゃん。楠さんだよ」
「昨日は迷ったけど電話をかけなかった。悪かったかな」
楠に声をかけると彼女はゆっくりを面を上げる。いかにも知的なやや釣り上がった目をした少女でやけにまつ毛が長い。整った顔立ちで美奈子とは違いスレンダーなスタイルだ。評価をすると大当たり。
それにしてもいきなり電話番号を渡すような積極性のある娘には見えない。
「楠沙月といいます。いきなりあんなものを渡してゴメンナサイ」
「いや、むしろ嬉しいよ。君みたいな奇麗な娘からアプローチしてもらえるなんて」
沙月は顔を赤らめる。それを見るとその娘がものすごく可愛く思えた。恥じらう姿は男をトリコにする仕草の一つである。
「あの、一ノ瀬先輩。私と付き合ってください」
沙月は深々と頭を下げ告白をする。秀一はこのことは予想の範疇であり、返事は彼女を見て決めようと考えていた。そして現れた少女は自分にはもったいないほど美しい。
「俺なんかでよかったら付き合おう」
秀一は沙月の申し出を了承する。
「本当ですか！」
沙月のはパッと明るい笑顔に表情を変えた。

「じゃあ、これからよろしく」
秀一は右手を差し出し握手を交わす。
「もうすぐチャイムが鳴るね」
美奈子はそう言って沙月と教室へと帰っていった。教室の時計は始業五分前を指している。
勢いで付き合うと言ってしまったものの秀一は女性と付き合ったことがない。どう沙月と付き合っていこうかと頭の中は一日中その題目に支配された。

姫とナイト

放課後となり教室を出ると廊下には美奈子と沙月の二人が秀一を待っていた。
「沙月ちゃん。待っていてくれたんだ。ありがとう」
沙月は秀一の特別な女性になったのにまたもや伏し目がちに立っている。
「お兄ちゃん。私には何も言うことないの？」
「あっ、いたのか」
「ひどい言い草」
「恋は人を盲目にする」
沙月は笑わない……見事に滑ったようです。
「そうだ、美奈子の方はどうなったのかな？」
「うん、今日の４時半に返事をするつもり」
「学校でか？」
「うん、だから今日は先に帰って」
「そうするよ。受け入れるのか？」
美奈子は押し黙った。まだ迷いが心に残っている。
「それなら沙月ちゃんと俺は先に帰るか。沙月ちゃんは何処に住んでいるの？」
沙月から住所を訊くと意外にもご近所さんだった。
「近くに住んでいるんだね」
「私は越してきたばかりですから」
暗い表情のままだ。秀一は彼女の心を解きほぐそうと思案する。
「……今日、ウチに来る？」
秀一の発言を聞いた沙月は目が驚いている。
「そんな、私達付き合って初日ですよ。いきなりそんな」
「お兄ちゃんは危険だもんね」
「コラ、ネズミ……じゃなくて美奈子」

思わずネズミと呼んでしまった。長年慣れ親しんだ呼び方はそう変えられない。
「いえ、そうじゃなくて。私いきなり一ノ瀬先輩の家にお邪魔したらふしだらな女だと思いません？」
「そんな訳無いじゃん。考えすぎだよ。ウチに来るの嫌？」
「そんなことはないです」
「じゃあ決定。彼氏の命令はきちんと聞くこと」
「うわあ、お兄ちゃん古臭い考え」
「お前はお前の彼氏と自分なりの関係を築けばいい」
「いわれなくてもそうするよ」
「沙月ちゃん。校門で待っていよう。どっちがはやいかな？」
二人は一度別れて校門で再び会う。先に来ていたのは沙月だった。
「待たせたね」
笑顔で話しかけると沙月はそっと微笑がえしをする。赤い陽光を浴びた沙月はそれはまた美しかった。秀一は沙月に引っ越してくる前のことなどを質問攻めしていると彼女も緊張が解けたのか少しずつ饒舌になる。
親の仕事の都合で今まで四度学校をかわったという。見るからに人見知りしそうな彼女にはそれは負担となっただろう。でも今度は卒業するまでこの学校に通えると語った。
「どうして俺なんかと付き合おうと思ったの？」
デリカシーのない質問だ。
「優しそうだからかな」
極めてシンプルな返答が返ってくる。本当は別の理由がるのかもと秀一は邪推するが、その理由とやらは見つからない。
（俺にこんな可愛い彼女が出来るわけはない）
家に着いた秀一がインターホンを押し「俺だよ」とこたえると解錠する音が耳に入る。
玄関を開けると母親がキッチンへと戻る途中であった。

「母さん」
声をかけると母親がこちらを振り返る。沙月の存在に即座に気づいて彼女に三度、秀一に二度視線を移す。
「こんにちは……こんばんはかな？」
「はじめまして、楠沙月と申します」
沙月は頭を下げる。
「あら、礼儀のしっかりした子ね。最近の子は挨拶もできないっていうのに」
「それはメディアがいってるだけだよ。情弱だな母さんは」
母親の目はこの娘との関係を教えなさいという目になっている。
「紹介するよ。この娘は俺の彼女なんだ」
生まれて初めて親に恋人を紹介したがスムーズに噛むことなく言えた。母親は意外に素っ気無く聞いている。
「美奈子ちゃんは？」
（なんで美奈子の名前が出てくるんだ？）
「美奈子は彼氏ができたって。いや今日返事するらしい」
「あら、そう。沙月ちゃんゆっくりしていってね」
母親はキッチンへと戻る。秀一は沙月を自分の部屋に案内した。
「お母様、美奈子ちゃんの事を気に入っているみたいね」
クッションに腰をかけて沙月がいう。
「幼馴染だからね。昔からよく知ってるんだよ」
秀一もクッションに座り背中をベッドに預け天井を見るように伸びをする。
「あーあ」
思わず欠伸が出てしまった。ハッと沙月を見ると穏やかに秀一を見つめていた。
「一ノ瀬先輩って気取ったところ見せないですね」
「格好付けたところでイケメンに変身するわけでもないし」
「そんな……一ノ瀬先輩はハンサムです。先輩の隠れファンは多いんですよ」

「お世辞ありがとう。姫」
パッと出た言葉だが、沙月は姫という言葉がピッタリとくる雰囲気と立ち居振る舞いだ。これからはそう呼ぶかと考えた。取り敢えず了承を得ておこう。
「ねえ、沙月ちゃん二人きりの時の呼び方を決めない？」
「二人きりの呼び名？」
「そう、特別な関係なんだからさ」
また彼女は顔を赤らめる。やめてくれ可愛すぎて胸が締め付けられる。と秀一は心で叫んだ。
「まず俺は君を姫と呼ぶから」
「ひ、姫……恥ずかしいです。他のにしてください」
「ダーメ。姫で決定」
「イジワル……じゃあ、一ノ瀬先輩は王子にしますよ」
沙月は反撃のつもりでいったのだろう。
「いいよ」
あっさりとかわされた。
「それでは姫。これからは宜しくお願いしますね」
「お、お……やっぱり言えない。秀一さんにして下さい」
沙月がランクを下げてくる。
「じゃあ、ナイトで。姫を守るナイトで」
「それなら妥協できます。ナイトこれから宜しくお願いしますね」
「うんよろしく」
二人は声を上げて笑った。秀一は恋人といることで自分が満ち足りた気持ちになれることに気付く。
それから雑談を交わし六時のニュースが始まる頃には彼女は帰っていった。門限は六時半だという。
「ねえ、秀一。あんた美奈子ちゃんのことどうも思ってないの？」
夕食時に母親が訊いてきた。
「異性としては意識してないかな。妹みたいなものだろ」
「そうよねえ。今日のあの娘可愛いわね。私の若い頃といい勝負だ

わ」
「いや、それは絶対にないから」
厚かましいことを平然と言う母親に秀一は冷たく否定した。

従姉

緑の絨毯の丘に腰をおろし宏遠な海と地平線を眺める。空の蒼と海の青、心を打たれる色はいつも青か緑色で穏やかな日差しを浴びて髪と肌は輝き、気分は晴れ晴れとし、頭が透き通るように気持ちがいい。

緩やかな眠気が陽光に触発され、瞼は重くなり抵抗する気もさらさらない僕はまどろみに落ちる。涼やかな風が頬をなで、緑の絨毯に横たわった僕を包みこむ。

幾時間、まどろみに身を任せていたのだろうか？　真上を見ても空はやっぱり蒼く、僕の視界に映るのは混じりけのない自然色の世界。

どこまでも軽い身体はこのままどこかへ飛んでいきそうで……そうなってもそれはそれで構わないけど。どこにでもある田舎の自然の一部に溶け込んだ僕の視界に一羽の鳥が入り込む。

「君は一人でなにしてるの？」

声には出さずテレパシーを彼に送る。恥ずかしがりやなのかな？

彼は遠くへ行ってしまった。

また一人ぼっちになった僕は口笛を吹き音と戯れる。耳障りの良いメロディーに感化されるように刹那に強い風が吹き僕の前髪をサラサラと靡かせる。ユートピア……どこにもない世界。でも僕が今存在するこの空間は心地良く何時までも浸っていたい神聖で侵さざるべきもの。

僕は目を瞑り、三十秒数える。

目を開けると何十羽ものカモメが空を滑空していた。恥ずかしがり屋の彼は友だちを連れて戻ってきたのだ。

「お帰りなさい」

僕は上半身を起こし空にむかって叫ぶとそれに答える如くカモメ

が鳴き声を上げ自慢気に羽を広げる。

「秀ちゃん」

不意に背後から声がかかる。僕のよく知っているその人の名は三原明子。歳は僕よりも十歳年上の近所に住む母方の従姉。よく可愛がってくれて、世話を焼いてくれて優しくて綺麗で清楚で……とにかく僕はこのお姉さんが好きで好きでたまらない。

「お姉ちゃん！」

「こら、鬼ごっこはどうしたの？」

僕と明子姉ちゃんは追いかけっこをしていた。ジャンケンで負けた僕が鬼になって明子姉ちゃんを追いかけていた。だけど僕の足は重たくて足かせに囚われるているかのように上手く足を捌くことが出来ずに、明子姉ちゃんは見えない所まで逃げてしまった。諦めた僕は丘の草原に居たという訳だ。

明子姉ちゃんは僕の右隣に腰を下ろすと結んでいた髪をほどいた。

「疲れちゃったの？」

「うん。足が上手く動かないんだ」

「そう、いたずらで私を置いて帰ったと思って探したのよ」

「ごめんなさい」

「許さない」

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

僕は明子姉ちゃんにだけは嫌われたくないので必死に涙ぐんで謝る。

「何泣いているの？」

「だってお姉ちゃんが許さないっていうから」

「冗談に決まってるでしょ」

「僕はお姉ちゃんだけには嫌われたくないんだ」

「うふふ、そんなに私のことが好きなの」

「うん、大好きだよ。世界で一番好きだよ」

風が吹き、明子姉ちゃんの髪が僕の鼻先に触れる。どの花よりも

芳しく魅力的な香りが僕の嗅覚を刺激する。
「お姉ちゃんは十歳も年上なんだよ」
「歳なんて関係ないよ。好きなんだもの」
「秀ちゃんは子どもだからそういえるんだけどね。大人になったら考えが変わるわよ」
言葉とは裏腹に明子姉ちゃんは嬉しそうに僕の瞳を見つめている。
「カモメが随分飛んでるね」
戻ってきたカモメたちは空で会話を交わしている。鳥のように自由に空を飛べたらいいなと彼らに羨望のまなざしを向けた。
「僕が呼んだんだよ」
「どうやって呼んだの？」
「テレパシーを送ったんだ」
「秀ちゃん凄いねえ。よし、じゃあお姉ちゃんがいまから秀ちゃんにテレパシーを送るから受け取ってね」
「うん」
……
「さあ、届いたかな？」
「……届かないよ」
「もう一度送るね」
……
「ちゃんと送ってくれてるの？」
「お姉ちゃんには難しいかな」
「なんて送ったのか僕に教えて」
僕が訊くと明子姉ちゃんは突然に僕に覆い被さってきた。
「重いよお姉ちゃん」
「男の子なら我慢しなさい。おしゃべりを出来ないようにしてあげる」
そう言うと明子姉ちゃんは僕の唇に自分の唇を押し当ててきた。
キス、接吻、口付け……僕にとってのファーストキス。明子姉ちゃんの柔らかな感触に背中に電流が走った。

「これで秀ちゃんはお姉ちゃんのものだからね」
ニッコリと微笑む明子姉ちゃんは女神だった。

―――――――――

重たい……。
瞼を少しずつ開いていくと秀一の身体に馬乗りになっている人が見える。
また美奈子のいたずらかと思っていたがスタイルが違うし顎の輪郭が違う。秀一がまじまじと確認すると三原明子だった。
（夢？　僕は夢を見ていた？）
秀一は真実に気付く。
「重たいよ姉ちゃん」
夢の中と似たセリフを吐く。
「やっと起きたか。昔から変わらないね」
明子は秀一の身体を降りてベッドの側面に立つ。背が高くスレンダーなのに出るところは出ている所は以前と全く変わりはない。しかし残念だが明子は人妻だ。二年前に結婚して隣町に移っている。
「日曜日くらいいいじゃないか」
「デートの約束一つもないのかな」
「余計なお世話です。それよりなんでここにいるの？」
明子は照れ笑いを浮かべる。ただの里帰りではなさそうだ。
「大きくなったね秀ちゃん」
今し方まで見ていた夢の記憶がまだ残っている秀一は、明子の唇の自然と目が行く。化粧はしていないがピンクの唇は艶かしい。もっとも明子自身、自分の美貌に自信があるからこそすっぴんでいられるのだろう。いや、近所だから手抜きしているだけなのか。
「旦那さんとケンカでもしたの？」
「そ、そんなことないわよ。里帰りしに来ただけだから」
明子のイントネーションで秀一は図星をついたことに気づいた。
「浮気でもされたんだ」

「違うわよ。私よりいい女なんていないでしょ」
「妻と愛人は別腹だっていうらしいよ」
いつもは強気の明子にここぞとばかりに攻撃を加える。秀一の心に、この夫婦が不仲になることを喜ぶ感情が芽生えている。
「だいたい俺を起こしに来た理由は何？」
「理由？」
しばらく待ったが明子は秀一の質問に的確な返答を出来ない。
「わかった！　俺に会いたかったんだ。一刻でも早く」
「……」
軽いジョークのつもりが雰囲気を悪くしてしまったようだ。本当に旦那さんと上手くいっていないのかと秀一は勘ぐる。
「どうしてわかちゃったのかなあ」
誰が見てもそうだと分かる作り笑い。
「俺はいい男に成長したかな？」
「主人と比べるとイマイチかな」
「俺は愛人でも構わないよ」
「男の言うセリフじゃないでしょ」
少し表情が持ち直してきたみたいだ。
「秀ちゃんはまだ私のこと好きなのかな？」
「好き？　俺が姉ちゃんを好きかって？」
「まさかあの日のことを忘れたの？　そんなことはないわよね」
秀一は明子に告白をした過去がある。しかしその頃には明子は既に婚約をしていて秀一の初めての告白は失敗に終わっている。秀一が女性に対してそれほど強い感情を持たなくなったのは明子から振られた日からだ。記憶の底に錘をつけて沈めてしまいたい過去。
「覚えてるよ勿論」
「秀ちゃんはいまでもフリーなのかな？」
「そんな事聞いてどうするの？　俺はおばさんには興味がないよ」
「ちょっと興味本位で聞いただけよ」
「彼女はいるよ。年下の」

「男って若い女が好きなのね」
「いやいや、俺はまだ高校生だし姉ちゃんの旦那さんと比較はできないだろ。そういえば父さんと母さんは？」
「夫婦で出かけて行ったわよ。仲良く手をつないでね。つまり私と秀ちゃんは今、二人きりってわけ」
『二人きり』この言葉が秀一の耳に残る。男と女が一つ屋根の下で二人きりというのはいくら昔からの知り合いでも意識するなというのは無理だ。しかも相手は初恋の女性。
「間違いってこういう時に起こるのかしらね」
明子は含みのある言葉を口にする。
「悪いけど彼女は裏切れないよ」
「心はそうかも知れないけど身体はそうとは言い切れるのかしらね」
明子が艶冶な表情になり秀一に身を寄せるようにベッドに座ってきた。人妻になって色香は何倍にも増し、年上の女性独特の包容力を醸し出している。
秀一の鼓動は狂おしいほどに脈打ちだして心臓が爆発してしましそうになる。
「秀ちゃんなら私を寂しくさせないわよね」
明子は徐々に顔を寄せてくる。秀一が金縛りにあったように微動だにせずにいるとやがて唇が触れ合い、彼女の舌が秀一の舌に絡みついてきた。
「妻と愛人が別腹なら、主人と愛人も別腹でしょ」
大人のキスを施したあと明子はそういう。秀一は明子の誘惑から逃れるすべを見つける意識すら脳から排除していた。

初恋の人はこちらを向かない

事を終えた秀一はベッドに仰向けになり天井とにらめっこをしている。裏切りの罪悪感、不貞の自己嫌悪、沙月の顔がちらつき目をぎゅっと瞑る。隣に寝ている明子の温もりは心地良く、その彼女の身体と性技は秀一に快楽を教えた。

憧れの女性と交合するのは人の理想であるが、それが他人の妻であるのはよろしいことではない。だが背徳行為は正常とは異質の精神の興奮を呼び起こし、秀一は真っ白な頭で一心不乱に肉体の悦楽を貪った。

「秀ちゃん、たくましくいわね」

この言葉は成長をたたえたものではなく性的な意味を表したもので男としては誇らしく喜ばしいこと。

秀一のモノはまた求められても良いように既に血が滾り怒張している。

「また大きくなってる」

秀一の身体に脚を絡ませている明子は情欲の色を隠さない。色気に満ちたピンク色の肌と潤んだ瞳はどんな男さえもその気にさせることが出来るであろう。

「俺、姉ちゃんがまだ好きなんだ」

閨の余韻の勢いのまま秀一は二度目の告白をした。

「それは言っちゃダメ」

明子は人差し指で秀一の口をふさぐ。

「それならこんな事しないでよ」

駄々っ子のような子どもじみた言い草で明子の顔を目を吊り上げて見つめる。秀一とて今回の彼女との事は彼女にとって遊びに過ぎないとは分かっている。しかし明子の身体を征服したという無意識な思いが秀一を感情的にしている。

「主人のことは嫌いになれないわ。秀ちゃんの気持ちはとても嬉し

いけど私は主人のものなの」
「それなら浮気なんかするなよ」
『主人のもの』という一言は現実だが口にして欲しくはないもの。
秀一は嫉妬心をさらに明子の主人に抱いた。一度目にしたことがあるその男に自分が劣っていたとは思えない。自分が社会人になれば明子を幸せにできる自信が秀一にはある。あと五年早く生まれていれば人生のルートは明子と共に歩んでいた確信もある。
「秀ちゃんだっていい思いはしたんだから私をそんなに責められるのかしら？　彼女が居ながら私を抱いた事は事実でしょ」
「姉ちゃんには言われたくはない。俺は別に結婚しているわけでもないし」
自身の後ろめたさを庇うために言い聞かせるように強気な発言をする。
「声が上ずってるわよ」
明子は余裕の笑みをたたえる。清楚だった明子は今は昔、人妻となり旦那との月日を重ねた彼女は肉欲への恥らいを消失している。
「お互いに黙っていれば誰も損をしないんだからいいじゃない」
「旦那さんに悪いとは……」
またもや明子は秀一に唇を重ね、秀一の言葉を遮った。
哀しいかな、秀一は一度知ったその快楽に肉体が溺れる。否定する言葉を脳内で検索し何度も念じても身体は明子を求め、彼女の細い身体を強く抱きしめ、愛撫し交合する。
……
夕方になり帰ってきた両親に挨拶を交わすと明子は旦那と暮らすマンションへ帰っていった。秀一に残ったものは明子の携帯番号と彼女の身体の温もり。
月曜日、ブルーマンデー……秀一は疲れを残した身体のまま早起きをして沙月を迎えに行った。
「おはよう。ナイト」

「姫、ごきげんうるわしゅうございます」
「ナイト、目が赤いわよ」
「結膜炎かな」
昨夜の晩、秀一は涙にくれていた。初恋の人と身体を重ねたのにその人の気持ちは自分に向くことは一向にない。明子は寂しさを紛らわせるために自分を利用したに過ぎないことの屈辱感は彼女が家に戻り時間が経過するごとに強固なものになっていった。忘れ去りたい情念がたった一日にして再び秀一を悩ませる。
「手を繋ごうか？」
秀一が提案をすると沙月は黙ったままその手を握り閉めてきた。
「そうだ、姫。美奈子のことなんだけどどうなったか知ってる？」
「うーん、詳しくは聞いてないです」
「そう」
秀一は美奈子に告白した物好きはどんな奴なのかは気になっている。
「まあ、直接本人に聞いてみるか」
「それがいいです。美奈子ちゃんはナイトの言う事を一番聞くと思います」
「いや、いまは彼氏のいうことが一番になったんじゃないかな。付き合っていればの話だけど」
「そうですね」
「俺の一番は沙月ちゃんだからね」
沙月はこの背筋の凍るような気障なセルフにもニッコリとはにかんだ笑顔で答えてくれる。秀一はそんな沙月への愛おしさが少しずつ着実に土台を形成しつつあるが昨日の明子との情事が頭をかすめてしまう。秀一は頭を振りそれを忘れようとする。
「ナイト、どうしたの？」
「頭が痛くてね」
「風邪でも引いてるのですか？」
「そうじゃないけど」

沙月に昨日のことを言えるはずもない。
「姫、好きだよ」
ごまかしにまた気障な事をいう。
「そんな恥ずかしいこと言わないでください」
真っ赤な顔で怒ったふりをする。でも手はしっかりと握ったままだ。
校門に近づくと手荷物検査が行われていた。秀一と沙月は握っていた手を離しそれぞれの学年担当の教員の元へと向かった。

岐路

美奈子は校舎の駐輪場の近くにある百年桜の下で、緊張した面持ちで昨日買った文庫本を読んでいた。文字を追っても追っても頭の中には入ってこない。ミステリーを選択したのは失敗だった。ロマンチックな恋愛小説にでもすればよかったと後悔している。

でもこれから彼女は現実に告白に答えなければならない。

好きな人は居るの？　そう聞かれたらどうしよう。美奈子には大事な人がいる。昔からの知り合いでいつも一緒に遊んで、一緒に通学をして一緒に……だけどその人とは恋仲ではない。

好きか嫌いかと二者択一を迫られるなら、迷わず好きとこたえられる。愛していると断言できる。告白されたことをその人に伝えたとき、その人は美奈子にそれを受け入れることを勧めた。止めて欲しかった……感情的になってそんなモノは断れよといって欲しかった。

だけど大事な人は美奈子の希望通りの言動をしてくれなかった。私は女として見られてないのかな？　美奈子の胸に霞がかかる。

大事な人に告白の返事をするといった日……お兄ちゃんと沙月が付き合うことになった日、美奈子は返事を出来ずにさらに一週間まってもらっている。何らかの結論は出さないといけない。

「ごめんね。待たせたかな」

美奈子に愛を告げた人が息を切らして目の前に現れた。

「いいえ、たいして待っていません」

「少しは待たせたんだね」

メガネの似合うその人は優しく美奈子に微笑みかけた。クールな見た目とは違う爽やかなその微笑みにつられて美奈子も顔を緩ませた。

「君が来てくれなかったらどうしようかと不安だったよ」

「約束は守るべきものですから」
「そういうところも可愛いよ」
厭うものなくあっさりという。
「か、可愛いですか……」
家族と秀一以外の口からこの言葉を聞いたのは生まれて初めてで、一瞬で美奈子の顔は赤くなり身体は蒸気でもわかせるほど暑く、汗が額から筋になって滴る。
「今日はそんなに暑いかな？」
「暑いですね」
「君はウブなんだね」
その人はそっと手を伸ばし手に持っていた白のハンカチで緊張して動けない美奈子に汗を拭った。
（どうしよう……頭が真っ白だわ。なんて話せばいいのよ）
「一之瀬くんはこのことを知っているのかな？」
「はい」
「なんて言ってた？」
「これも人生経験だと言ってました」
「彼らしいね」
「そうですか？」
「一之瀬くんってクールで物思いにふけった顔をよくしている。でも彼は意外とモテるんだ」
「お兄ちゃんは自分はもてないと自虐してましたけど……」
「それは嘘。彼は何人も女の子から言い寄られている」
（そんなワケない。もしそうなら私に黙っているはずないじゃない）
「幼馴染なんだっけ？　そういう話とかしないの？」
「しないです」
（帰った後、問い詰めてやる！！）
少しの会話で美奈子の緊張はだいぶほぐれた。頭も違和感がない程度には働いている。そよ風のおかげで身体も暑くは無くなっている。

「そろそろ本題に入ろうか。君の返事を聞かせて欲しい」
この一言でまた身体が沸騰する。美奈子は答えをまだ決めていない。
「……」
「返事を決めかねているんだ」
「はい。こういうの初めてなんです」
「緊張している君を見ていれば分かるよ。付き合うなんて大したものではないんだけど。初めてなら仕方ないかな。私だって初めての時は卒倒してしまうかと思ったもの」
「なんと言ったらいいのか適当な言葉が見つからないんです」
「はい、いいえの二択でいいんだけどね。何が心に引っかかっているのかな？　もしかして一之瀬くんのことかな」
その通りで美奈子の頭には秀一が引っかかっている。もし自分が他の人と付き合うとなったら、秀一とはどうなってしまうのか不安がよぎる。ましてや秀一は沙月と付き合い始めている。
（バカバカバカ……沙月がお兄ちゃんにアプローチしてきたときどうして言い訳をつけて断らなかったのよ）
美奈子は脳内で自分をメッタ打ちにする。
「一之瀬くんは彼女と一緒に登校していたよ」
「それは知ってます」
「それなら君の入る余地は今のところないということ。お試しで私と付き合ってみない？　嫌なら別れればいいんだしね」
「そんな軽いことなんですか」
「重苦しいことではない。私は君が好きだから一緒にいたい。単純なこと」
美奈子は秀一と付き合い始めて明るくなった沙月を悲しませることは出来ない。幼馴染という立場に自分は胡座をかいていたのかもしれない。沙月と秀一の間に割って入ることはしてはいけないことでそれをしてしまえば友人を失うことになる。
「決心かつかないときは運に任せてみない？」

その人はポケットからダイスを取り出した。
「君の好きな数字は？」
「一です」
「よし。なら奇数なら君とは付き合わない。告白を忘れてくれて構わない。でも偶数が出れば私と付き合ってもらうよ。それでいい？」
そんな事で決めることかと思ったが、何時までも返事を出来ないのも良いことではないとは考える。美奈子はその人は嫌いではない。この際、ダイスに任せてみても……やっぱり良くない。
「いえ、自分で判断することにします」
美奈子の脳裏に秀一との想い出が駆け巡ると不意に涙が溢れてくる。二人には数えきれない想い出がありすぎる。しかし何時までもこの関係が続くわけがないことを身につまされる時期が来てしまった。
涙を拭った後、美奈子は告白を受け入れた。

封筒

告白を受け入れた美奈子は家に戻ると一目散に火照る身体にシャワーを浴びせ隣の秀一の家へと向かった。秀一が帰っていない可能性や沙月と居ることの想定をする余裕は持ちあわせてはいない。気の赴くまま、秀一のもとへと一刻も早く着きたいという意思のみが美奈子の頭を占領している。

髪もまだ乾かぬうちに服を着替え秀一の家のインターホンを押す。

「あら、美奈子ちゃんいらっしゃい」

ドアフォンに映っている美奈子を見て秀一の母はにこやかに言う。

「開いてるから入ってらっしゃい」

言われたままに玄関を開けると母親が出迎えに来ている。気のせいか美奈子にとって秀一の母の存在が遠のいた気がして満面の笑みにはなれない。

「美奈子ちゃん、具合でも悪いのかしら？　顔色が良くないわ」

秀一の母は美奈子の額に手を当てる。

「少し熱があるみたいだわ。それに髪がまだ乾いてないわよ。乾かしてきたらどう？」

「ドライヤーお借りしますね」

この家の作りはよく知っている。いままで幾度と無くここに美奈子は通ってきた。幼い頃はしょっちゅうお泊りもした。一緒の布団で秀一と眠り寝相の悪さをからかわれたりしたっけ。遠い昔のことが頭をめぐる。あの頃は良かった。年寄り臭いセリフをツンとつぶやく。誰にも聞こえない独り言。

美奈子はドライヤーで丹念に髪を乾かしリビングにあるソファに腰をかけた。

「美奈子ちゃん。焦っているみたいだけど何かあったの？」

秀一の母は物腰の柔らかな口調で話しかけてきた。年の割には若く見えるのは幸せだからなのかな？　なんてことが美奈子の脳によ

ぎる。
「焦っているというか……」
美奈子は自分の心情を言葉にうまく変換できずもどかしさを覚える。
「お兄ちゃんはまだ帰ってないの？」
玄関に靴はなかったので確認のために訊いてみる。
「うん、まだ帰っていないわ」
（沙月と寄り道でもしているのかしら？）
「この間の娘。沙月ちゃんだったかな。あの娘はどんな娘なの？
美奈子ちゃんのクラスメイトだって秀一は言ってたわよ」
丁度沙月の話題を振ってきた。
「高校に入って一番最初に友だちになった娘です。普段はおっとりしてて、とても大人しいですよ」
「なんで秀一なんて選んだのかしらね。物好きも居るものだわ」
二人はテレビを見ながら煎餅をつまんで口に運びつつ会話をしている。仲の良い嫁と姑のようだ。
「とある人によればお兄ちゃんはもてているらしいって」
「へえ、あんな小僧の何処がいいのかしらね。男はパパみたいにワイルドじゃないと私は嫌だわ」
「お兄ちゃんは素敵だとおもうけど……」
「あら、美奈子ちゃんもあんなのがストライクゾーンなの？　時代は変わったわね。この世の終わりは近いわね」
この母親は自分の息子には容赦がない。見た目からは想像のつかない毒舌を息子に吐くことがる。
「それなら美奈子ちゃんはどうして秀一を仕留めなかったのよ」
「それは……」
美奈子にとって秀一は身近にいるのが当たり前で付き合う、付き合わないという形式ばった関係ではなかった。今にしてみればそれが油断となって秀一は沙月と恋仲になってしまった。もうわずか、間の開いた関係ならまた二人は違った関係を築いていただろうが、

言葉通りの後悔先に立たずだ。
「美奈子ちゃんとなら上手くやっていけるのにね」
左目でウインクをする。ドラマを終わり夕方のニュースが画面には流れている。
「それにしても遅いわね。帰宅部の将棋オタクのくせに」
窓の外の景色は暗闇で朧気な輪郭しか見ることが出来ない。
「さては、あのやろう。男の本性をさらけ出したのかな。さあ夕飯の支度、支度」
母親はキッチンへと行く。
「じゃあ、私はお兄ちゃんの部屋で待っているね」
美奈子もソファから腰を上げて秀一の部屋に向かった。
「部屋の中を捜索でもしていたら。いい暇つぶしになるわよ」
本気なのか冗談なのか分からない事をいう。主のいない部屋に着くと美奈子はベッドに突っ伏した。
美奈子にとって馴染みの深い匂いが鼻先に触れる。秀一の匂いだ。しばらくの間、美奈子はベッドに顔をうずめていた。
「そうだ探索しちゃおう。帰って来ないのが悪いんだ」
身勝手な論理に従って美奈子は捜索を開始する。
「まずはベッドの下からかな」
そこには将棋盤と棋書が隠されておりさらにその奥には長方形の箱がしまいこんであった。
（もしやこれがあの……）
箱をゆっくりと開けるとアダルト雑誌が五冊重ねられていた。それぞれタイトルが違って洋物が一冊ある。
「ふむふむこれが噂のブツね」
表紙を観ただけですぐにそれと分かる品物である。美奈子は初めて男専用の雑誌を手に取りパラパラと……。
「キャッ！」
美奈子は雑誌からパッと手を離した。思い描いていた以上にその内容は過激で刺激の強いものだったらしい。

「な、なによ。お兄ちゃんこんなの読んでるの？」
美奈子とてその本を見て秀一が何をしているのか知らないわけではない。だが、その雑誌にのっている女性は性器をアピールするポーズを取ったり男の人と絡みあったりしている。そして写真以外のページにはセックスの指南が書かれている。
「こんな格好しなくちゃいけないの。恥ずかしすぎる」
一人アダルト雑誌を読み赤面している姿はなんとも滑稽ではある。
「ダメダメ、絶対ダメ！！」
美奈子は雑誌をもとに戻し、次に押入れを探索する。特に目新しいものはなく見たことのあるアルバムを開いてみる。
「私こんな顔だったんだ」
アルバムは見るたびに違う感想を述べてしまうシロモノである。このアルバムには美奈子も一緒に撮られている写真も多い。にやにやが止まらず最期まで見ているとそのアルバムからひらりと一通の封筒が空間を泳ぎ絨毯に着地する。
宛先のない封筒。開けてはいけない気はするが妙に気になるその封筒を美奈子は手にとってみる。
何の変哲もない白いどこにでもある封筒。だけどいわくが有りげな封筒。幼馴染であろうが超えてはいけないプライバシーはあるとは思う……だけど気になってしまう。
いまは私一人しかいない。きちんと元通りにすればバレない。美奈子の心境の方向性はきまっている。だけど、やっぱり、最低限のところは守らないと……。なかなか結論が出ない。
「おい、美奈子何見てるんだ？」
振り返ると秀一が美奈子を視界の中心に捉えていた。

中身

美奈子は手に取っている白い封筒をもとに戻そうかと思案したが持っているところをバッチリと秀一に抑えられている。

「何をしているのかな？　小ネズミちゃん」

誰が見てもそうと分かるほど秀一の表情は怒りの感情を表面に表している。大魔神とは違い、彼が起こっているときはポーカーフェイスになってとつとつと平坦なイントネーションで言葉を発する。今は正しくその典型例である。

「えっとね……」

うまい言い訳がとっさには浮かばない。というかこの情況にいて言い訳できるのは嘘をつくことに全くの抵抗のない人格を持った一部の人間だけであろう。秀一のの視線は白い封筒に注がれている。

「中身を見たのか？」

「えっ」

「その封筒の中身を見たのかと聞いているんだ」

淡々と話しかけるが威圧感が美奈子を襲う。

「まだ見てないよ」

「まだ？」

マズい言い方をしてしまった。

「ではネズミは中身を見るつもりだったのか？　正直に白状しなさい」

呆れたような、怒りを隠しているような、目を細め秀一は詰問をしてくる。何年ぶりだろうかというほど怒っている。

「ゴメンナサイ」

謝るしか選ぶ道は存在しなかった。美奈子は神妙に深く頭を下げる。

「だいたい人の部屋を勝手に扱うのは不躾ではないのかね」

「はい。その通りです」

「人には誰しもプライバシーというものがある。ネズミは分からないのかな」
「分かります」
「それなら自分のしたことは罪深いことだと認めるか？」
「認めます」
瞼に涙がたまってきている。これ以上責められたら。それは頬を伝うことになるのは間違いない。
「ふーん」
秀一は腕を組み座布団に座り込み思案する。さて、どういう処分を課そうかといった空気を漂わせている。
「いくら幼馴染みといっても調子に乗りすぎだぞ。俺らは所詮は他人なんだから」
「他人……他人……所詮」
秀一の気にもとめない一言で、美奈子の胸にとてつもない暗闇が襲いかかった。秀一と出会って十数年、こんなに悲しく切ない言葉を浴びっせられたのは初めてである。淡い気持ちを秀一にいだいていたことを全て裏っ返しにされるきつい一言であった。
スーッと美奈子の目から涙がこぼれ落ちる。一筋、二筋……止めどなく流れる涙は顔を押さえている両手から漏れ電灯に照らされ光っている。
「うっ……ううっ……」
情けないとかみっともないとかそんな気持ちは遥か彼方に旅に出て美奈子は見えも外聞もなく呻いて泣いている。
説教を続ける気だった秀一はかえってその姿に驚いてしまった。
「そんなに泣く事ないじゃないか」
「だって、だって……」
美奈子とて秀一が特別にひどいことは言ったわけではないと承知している。だけど理性を飛び越えて感情が美奈子をつき動かしている。
「俺は怒ってないから。気にするな。まだ中身は見ていないんだろ

う」
秀一は機嫌をとる事を言い始める。
だが泣き止みたくても涙は溢れ続け、美奈子の目は真っ赤に染まっている。
秀一はなすすべなく首を捻ったり後頭部をかいたりしこれまで美奈子をどうやって泣き止ませてきたのか脳で再生をしている。しかし思い出すのは子供の頃ばかりのことでここ数年はしかっていない。打つ手なし、指し手なし投了したいがそうはいかない。
やがて、ピークは治まったみたいで美奈子が目をこすりだした。秀一もひと安心したところ昔見た映画のワンシーンを記憶に呼び起こした。
「大丈夫だよ美奈子。俺はずっと君といるから」
美奈子を抱きしめ耳元でつぶやいた。ぞっとするセリフで背中が痒くなる。それでも美奈子を泣きやませるためだと言い聞かせ美奈子の顔を胸に埋める。一時すると、美奈子は泣き止んだようで大人しく抱かれ吐息だけが耳に届く。
「ふう」
安心した秀一が胸から美奈子の顔を話すと
「スー……スー……」
寝てやがった。
「こいつはもう」
そう思ったが、美奈子の身体が赤く上気していることに気付いた。額に手を添えると熱が伝わってくる。
「熱発したのか」
美奈子は興奮すると熱発しやすい体質で試験が終わった翌日によく休んでいる。
「よっこいしょ。重いな」
秀一は美奈子をベッドに寝かせ掛け布団をかけた。それからリビングに行き母から熱冷ましのシートを出してもらう。
「また美奈子が熱発したよ」

「あんた変なことしたんじゃないでしょうね。責任は取りなさいよ」
「美奈子にはそんな気起きないって何回言わせるつもりだよ」
母の戯言をスルー出来ないのはまだまだ未熟な証拠なのかな？
と思いつつ美奈子の額に熱冷ましを当て身体全体にきちんと掛け布団を掛ける。

二時間後
秀一がネット将棋を遊んでいると背後から気配がした。首をひねると美奈子が視界に入った。
「やっと起きたか。具合はどうだ？」
「うん、いいみたい。お兄ちゃんありがとう」
「なあ、美奈子。あの封筒の中身そんなに気になるか」
「うん……気になる」
「大したものじゃないんだけどな」
「だってわざわざ。封筒に入れてあるんだもの」
「アルバムにとじるのが面倒だっただけだよ」
「じゃあ、見ても問題ないわよね」
「見せてやるよ」
秀一は封筒から一枚の写真を取り出した。美奈子と明子と秀一が三人で旅行へ行ったときに写した写真であった。
「懐かしい」
「なっ、大したものじゃないだろ」
「そうだね。泣いて損したよ」
「美奈子が勝手に泣いただけだがな」
「もうそれは忘れて」
時計の針は7時を過ぎている。
「私帰るね。お兄ちゃんありがとう」
美奈子が礼を言って帰った後、秀一は一枚の写真と便箋を久しぶりに照明の下にさらけ出した。
明子がひとりで写っている写真と明子に送った恋文である。以前

書いた文章とはいえ稚拙な文章で読むのが恥ずかしくなる語彙のオンパレードだった。だけど明子への思いが存分に詰まっている文章である。まだ、秀一は明子を心から消し去ることが出来ない。あの日身体を重ね想いは増幅する一方である。
そしてもう一枚それよりもさらに幼い字で書かれた白い紙が封筒に入っているがそれは出すことはなかった。

自分のベッドに横になった美奈子は色々なことがありすぎた今日を振り返っていた。
「そういえばお兄ちゃんに告白の返事をしたこと言わなかったな」
美奈子は自分が異性と付き合うとなったときに秀一がどのような反応をするのか知りたかった。今日いえなかったのは自分が悪いんだけど。
「所詮は他人」
事実だけどなんどもこのフレーズが頭をよぎる。自分は秀一に取って特別な人間ではないのかな？
いけない。また涙が溢れてくる。でもお兄ちゃんは私を抱きしめてくれた。好意を持っていないならあんな事する訳ないわよね。
気分の波が激しく上下する。なんだか寝付けそうにない。

両手に花

目覚まし時計のうざったいベルに起こされ。軽くストレッチをしてから秀一は制服のブレザーに着替えた。学年によってネクタイの色が決まっていて秀一は赤いネクタイを身に付けている。机の上の携帯を手に取り割り振られた番号を打ち込む。二度目のコールですぐに相手は出た。

「姫、おはよう」

「おはようナイト」

「朝なのにナイトとはこれいかに……ごめん今のキャンセルね」

沙月の笑い声が聞こえる。

「今日は迎えに行くけど補習とかないよね？」

「はい。今日はありません」

「うん。では待っててね」

「待ってます」

携帯を切り顔を洗って眠気を覚まし秀一は食卓へと向かう。

「なんでいるんだよ？」

食卓には美奈子がいて朝食を口に運んでいた。

「小百合さん熱が出たんだって」

母が美奈子の代わりに事情を説明する。

「そうか、でも美奈子。お前は少しふっくらしすぎているから朝食を抜いてもいいんじゃないか」

「ひどーい」

美奈子の体調は良さそうで少しほっとした。

「釣った魚には餌をやらないんだね」

「はっ？　何いってんだ」

秀一の頭は？マークで充満する。

「なになに？」

母親が案の定をダボハゼのように食いついてきた。

「昨日ね、お兄ちゃん私を抱いたの？」
「その言い方はやめろ！　いらん誤解を生むだろう。お前が泣くから慰めただけだ」
「おばさん。お兄ちゃんなんて言ったと思う？」
　秀一の話など柳に風に話を続ける。
「早く聞かせてよ」
「俺はずっと君といるからだって」
「何その昭和のセリフ」
　爆笑しやがる。
　いや、昭和の映画のセリフをパクった訳なんだが……。それを言ったとて言い訳にしかとらえない母であるのは百も二百も承知している。
「彼女が居るのにあんたそんな事言ったの？　プレイボーイねえ」
「だから誤解だって」
「そもそも、なんで美奈子ちゃんを泣かせたのよ」
　そう聞かれると非常に困る。なぜ昨日美奈子があんなに感情をあらわに号泣したのか秀一は明確な理由を整理出来ていない。
「お兄ちゃんがね。口では言えないひどいことを言ったのよ」
　都合のいいことを言い出す。美奈子は昔から母のツボを心得ている。
「あんたなんて言ったのよ？」
「いや特にひどいことは言ってないよ」
「女の口からは言えないことを言われたわ」
「あんた言いなさいよ」
「パスする」
　相手にすると秀一が勝てるわけがない。
　秀一は無視を決め込んで二人のうるさい女の罵声を浴びながら朝食を摂り始めた。よくもまあ昔のことを覚えているものですっかり忘れていることまでネチネチと責められる。
（はあ、早く大人しい沙月ちゃんに会いたい。いや待てよ。こいつ

がいるということは）
秀一の杞憂通り美奈子と一緒に登校するはめになった。
「俺は沙月を迎えに行くんだけど」
気を使えと促したつもりだったが
「私も行く」
美奈子は気を使う素振りすら見せずに即答する。ふう、とため息を付き秀一と美奈子は並んで沙月の家へと向かう。
……
「ああ、そういえば。お前彼氏できたのか？」
思い出したように秀一は美奈子に返事をしたのか訊く。昨日聞き出そうを思っていたが昨日はあれだったから訊くどころではなかった。
「……うん」
それまでべらべらしゃべっていた美奈子のトーンが一気にダウンする。
「なんでへこんでるんだよ」
「なんでだろう？　自分でも分かんない」
「断ったのか？」
「ううん」
首を左右にふる。
「嬉しくないのか？　先週返事したんだよな」
「踏ん切りがつかなくて昨日まで待ってもらっていたの」
「好きじゃないのか？」
「いい人なんだけど……なんか違うの」
自分の想いが秀一にあるとは言えない、幼馴染で好きな人だけど友人の彼氏。美奈子は人を傷つけたくない。しかしそれは自分が傷つきたくないということでもある。
「それなら断れば良かった」
「お兄ちゃんが勧めたんじゃない」
秀一は島村を想定して応援のつもりで勧めたが人違いだったとは

言えない。
「まあ、なんだ青春の1ページとでも思ってな……」
「お兄ちゃんのいう事っていつも古臭いわよね」
玉頭に歩を突かれた気分だ。昭和のドラマや映画がツボにハマることはよく自覚している。いまのドラマの一つのネタを薄く金箔のようにできるだけ伸ばしてみました、という感じがどうも好きにはなれない。しかし昔のドラマはよくセリフがカットされている。作品の生命というべきセリフが差別や蔑視表現だと言って削除されるのは当時の作り手を馬鹿にしているように思うのだが人権屋は度量が狭い。
「お試し期間中なのよ。本人がそれでいいんだって」
「奇特な奴だな。誰なんだ？　俺の知らない人か？」
「教えないもんね」
「じゃあ聞かない。この話は終了」
なんであっさり終了なのよ私のことどうでもいいの？　私は散々に悩んだのに。美奈子は不満だが笑顔は崩さずその後も元気にしゃべり続けた。
暫く歩くと和風の大きな門構えの家にたどり着く。沙月の家だ。
「わあ、すごい家」
「俺も最初はビビった。どおりで上品なわけだよ」
秀一はインターホンを押して苗字をを名乗った。まもなく沙月が門から出てきた。
「おはよう姫……じゃなかった沙月ちゃん」
「おはようございます。秀一さん」
二人は会釈を交わす。いまとなっては沙月は下を向かずにまっすぐに顔を見てくれるしフランクな会話も弾むようになっている。
「姫？　いま姫って呼んでなかった？」
美奈子は聞き逃していなかった。
「気のせいだよ」
「おはよう美奈子ちゃん。気のせいですよ」

二人は何事もなかったように歩を進めていく。
「うーん。姫って言ったような……」
「俺がそんなバカップルみたいなこというわけ無いだろう。沙月ちゃんだって恥ずかしがるし」
「そ、そうですよ」
秀一の脇に変な汗が吹き出す。
「そうよねえ。いくらなんでも姫はないわよね」
ほっとした。美奈子の地獄耳には気を付けないといけないと秀一は自戒する。
ともあれ他人から見れば両手に花の状況で秀一は二人に挟まれながら登校する。

才女からのお誘い

教室に着くと秀一は鞄を机の上に置いたままそれをクッション替わりにしてだらりと顔を預けた。朝から母と美奈子に散々言われ放題言われ、聞いているだけで疲れが溜まっている。

「神よなぜあなたはあの様なふしだらで罪深い女を私の母とお決めになったのか」

と言うが秀一は無神論者で都合のいい時だけ神頼みをする程度の信仰心である。母方の田舎の家系は代々神社の巫女を勤め上げてきたという話をおばあちゃんから聞いたことがあるがそれに特に思い入れることはない。

「一之瀬くんおはよう」

一時限目の嫌いな数学のことをふとよぎらせている時、聞いたことはあるが聴き慣れていない声が聞こえてきた。顔を上げると恭子が机を挟んで目の前に立っている。

「???」

はて、恭子は何の用事があるのだろうかという疑問がまず頭に浮かぶ。そしてその次に彼女が眼鏡をかけていないことに気がついた。眼鏡を掛けている彼女はいかにも知的な才女といった面立ちをしているが眼鏡を外した彼女は意外にも童顔で険しさはなく優しいお姉さんという感じである。

「今日は眼鏡をかけてないんだ？」

「うん。コンタクトにしてみたの」

「なんか雰囲気が違うね」

「どう違うのかしら？」

柔らかに微笑みかける。

「眼鏡を外すと童顔なんだね」

「眼鏡をけ掛けているときは老けているということかしら」

「そうじゃなくてオトナっぽい感じかな」

「気を使ってくれてるんだ」
「気なんか使ってないよ。美貌の才女ってまさしく進藤さんのことだよ」
「お世辞が上手ですこと」
旧友のように気軽に話せている自分が秀一には不思議である。ずっと同じクラスであったがまともな会話をしたことなどなかったのだから。
「少し気分を変えたくなったんだ」
「へえ、進藤さんでもそんなコト思うんだ」
「私をロボットだと思っていたの？」
「うん。点取り機だと思っていた」
「キツイこというのね」
「だってさ、俺からしたら進藤さんなんて天上人だよ」
「クラスメートなんだから……天上人って言葉のセンスが一之瀬くんらしいけど」
これはどう受け取ればいいのだろう。周りに入るクラスメートは男だけでなく女もこちらを見ている。
「俺になんか用事があるの？」
「あら、用事が無いと話しかけてはいけないのかしら」
「そうじゃないけど、珍しいことがあるもんだと」
「ちょっと一之瀬くんの声が聞きたくなってね」
ドキリとさせられた。バカで軽薄な男なら勘違いしそうな一言である。秀一は自分がもてない男だと自覚しているからジョークだと受け取ることが即座にできるが、流石にこの言葉はわずかながら心の巖に響いた。
「彼氏に聞かれたらまずいセリフを言ったね」
「彼氏なんかいないわよ。安心して。大事に想っている人はいるけどね」
「俺には彼女がいるから微妙な言葉を使われると困る。ちなみにこの間の娘は違うから」

「根津美奈子ちゃんね」
（フルネーム教えてたっけ？　思い出せないや）
「そう、あいつはただの幼馴染」
「彼女はそうは思ってなさそうだけど」
「それはなんで？」
「一之瀬くんは鈍いのね。嫌いな男と一緒に下校したいとは普通思わないでしょ」
「道を知らないだけかもしれないし。あいつは方向音痴だから」
「それはいくらなんでもひどい解釈ね。ではどうして同じ高校を彼女は選んだのかしら」
「近いからかな」
「一之瀬くんって本当に女の子の気持ちがわからないのね。彼女は一ノ瀬くんのことが好きなのよ」
「兄妹感覚なんだろうね」
「だから……。もういいわ本題に入りましょう。ここに映画にチケットが四枚あります」
　しなやかな手つきで映画のチケットを秀一に提示する。
「観に行くメンバーは今のところ二人決まっていてそれは私と弟。後二人足らないわけです」
「それで僕を誘ってきたということか」
「はい。そしてもう一人は根津さんにしてください」
「美奈子？　彼女じゃだめなの？」
「ダメです。決める権利はチケットを持っている私にあります」
「俺はパスするよ。どうせなら彼女とデートしたいしね」
「一之瀬くんデートしたことないんでしょ」
　なんで知っている？　秀一は驚いてしまいそのまま表情に出した。
「復活の日のリメイクの試写会なんですよ。それでも断りますか？」
　復活の日は秀一の大好きな映画でこの映画から彼の昭和映画好きが始まった。恭子は詰将棋を解くように一手一手着実に詰みに向かって秀一を説得する。

「形式としてはダブルデートになるのか」
「私と根津さんどっちが一之瀬くんのパートナーなの？」
「進藤さんは弟と来るんだから俺のパートナーは一応進藤さんってことになるんじゃない」
「一之瀬くんは私とデートするのは嫌ですか？」
嫌とは言えない形作りをしておいてのこの発言である。
「むしろ嬉しいよ」
とは言っては見たものの沙月が頭に浮かぶ、沙月には黙っておくしかない。気づいたが秀一を沙月は未だに休日のデートをしていない。
「それでは決定ね。今度の日曜日はデートしましょう」
教室中がこちらを注視した。目立たないキャラを演じてきたのにこれで台無しだ。このクラス、いやこの学校で一番の才女とデートをすることを公言されてしまった。今さら断るほどみっともない男でもない。
要件が済んで進藤が席に戻ると秀一は四方八方からじとっとした視線を浴びる。
（俺が誘ったんじゃないのに、勘弁してくれよ）
恭子に撃沈した男どもは恨めしく秀一を睨みつけている。
授業が始まる前から持久走後のような重たい疲れが秀一の身体にのしかかった。

「ナイト。私とデートしませんか？」
放課後、並んで家路についている時に沙月はデートの誘いをかけてきた。沙月から誘ってきたのは意外だった。
「日曜日に街にでも行きませんか？」
街にでもというところが箱入り娘らしい言葉である。沙月は数度引越しをしてきたのだが元々の家がいま住んでいる大邸宅ということらしい。沙月の所作を見ているだけで惚れ惚れしてしまうがおば

あちゃんに随分と厳しくしつけられたと言っていた。俺なんかが彼氏でいいのだろうかと自問するが沙月が秀一を選んだわけだし結婚するわけでもないよなと楽観視はしている。
しかし日曜日はあいにく試写会の日である。
「姫、土曜日じゃだめかな？　日曜日は先約があるんだ」
「土曜日は親戚の集まりがありまして私は外せません。そもそもナイトが姫に逆らうのですか？」
最近会話の中でちょくちょく冗談でサディスティックな表現をすることがる。それだけ秀一に心を開いたということなのだろう。
「申し訳ありません姫。その日は決戦がありまして」
「ナイトが行かないと戦況が思わしくないのですか？」
「はい。私目に直々に召集がかかっておりまして」
「そうそれなら仕方ないわね」
「埋め合わせはこの戦が片付けば存分にいたしますので今回はお許しださい」
「許しません……とはいかないんですね。分かりましたその代わり来週の日曜日は開けていてください」
「御意」
分かれ道秀一は約束のキスをそっと頬にした。
「姫、私の御心は常に貴方のもとにございます」
沙月は真っ赤に顔で駆けていってしまった。

前日

明日のデートを控え、秀一はさぞ緊張しているかと思いきや呑気にテレビを観ている。

初めてのデートではあるが何も思い入れるものはない。時々自分は本気で好きになれないのではないかと疑念を持つ、それは秀一には執着心が薄いためだ。淡白は性質といったほうが適当かもしれない。

彼にとっては明子が嫁いで行ってしまったのが唯一の精神の挫折であるがその挫折は残酷なほど大きすぎて、彼の気質をニヒルなものとしている。

時計の針は２２時過ぎを指している。秀一はベッドに身体を預け携帯を見ると着信ランプが点灯していた。不在着信・楠沙月とディスプレイに文字が表示されていた。

「そうか、今日は姫は親戚の集まりだと言ってたな」

寝ているかもしれないが取り敢えず沙月に掛けてみる。

「こんばんは。ナイト」

「こんばんは。姫」

沙月の声がやや遠くに感じる。

「もしかして寝てた？」

「はい。今日は疲れましたわ」

「ごめんね。起こしちゃって」

「いいえ。ナイトの声が聞けて嬉しいです」

「俺も姫と話せて嬉しいよ。ところで着信が入ってたんだけど」

「退屈でナイトとお話がしたくなりまして。でも出てくれなかったですね」

「それは悪かった」

電話越しに見えるわけもなく頭をさげる。

「謝らなくてもいいです。だけど……」

「だけど？」
「明日のことどうして私に隠したりしたんですか？」
（明日のこと？　まさか美奈子の奴）
「美奈子ちゃんが明日ナイトと映画を観に行くと言ってました」
（やはり奴の仕業か）
「どうして私を誘ってくれないのですか」
「姫が親戚の集まりで疲れていると思っていたからね」
軽く言い訳をしたつもりだがすぐにうっかりミスに気づいた。
「あら？　私が誘ったとき用事があると言いませんでした？　その用事というのが映画を観に行くことでしょう？」
自分でも矛盾は分かっていた。もっと頭で咀嚼してから言葉は発するべきだと反省してももう遅い。
「私に隠したいことだったんですか？」
口調に念が込められている。沙月が怒るのももっともだからここは平身低頭に徹しようと秀一は覚悟した。
「私に隠すということは美奈子ちゃんとは違う女の人も居るんですね？」
言い逃れするのは難しそうだし自分にはやましさはないので秀一は沙月に成り行きを説明した。
「そうですか。進藤先輩が誘ったんですね。よく分かりました」
一語一語が重く感情がこもっている。
「それでどうして断らなかったのですか？」
「映画ぐらいいいか……」
「ナイトは進藤先輩に好意を持っているんですね」
弁明を遮って。静かに問いかけてくる。
「そんなことありえない。俺には姫がいる」
「それなら私に黙っていたのはどう説明つけますか？」
「姫に心配を掛けたくはなかったからさ」
「それなら、さきほど一番初めに、私が疲れているかもしれないからとかいう弁明をなさったのはおかしいことではないですか。つま

らない嘘で私を騙そうとしましたよね。それに私が美奈子ちゃんから聞かなかったら黙り通すつもりだったのでしょう。私にとっては一番心配をしてしまう状況ではないですか」
考えないでポッと口に出すから某政治家のように抜き差しならぬ事になってしまう。
「俺は進藤さんに興味はないし全然好みでもない」
「それはナイトがそうであってあちらさんはどう想っているのか分からないでしょう」
「俺なんて相手にされないよ」
「相手してもらえればなびくのですか？」
「そういう意味で言ったんじゃない」
「どういう意味ですか？」
「それは……」
「さっさと答えてください。やましい気持ちはないんでしょ」
沙月は冷静でいられる許容範囲を超えてしまっている。しかしそれはひとえに秀一のことが大事で愛しているからである。
「断って」
「断る？　いまから？」
「はい。いまから電話を切ってすぐに進藤先輩に断りを入れてください」
「それは失礼すぎるよ」
「私に誠意を見せてください。私はあなたの彼女ですよ」
「それはできないよ」
「なぜ？」
「断るのにもう遅いよ」
「私はナイトが他の女性と話すことすら嫌なんです」
「それは気にし過ぎだよ。俺は姫を裏切ったりしない。絶対に」
「私だってナイトを信頼しています。だけど……進藤先輩は女から見ても魅力的な人ですから。こんな私嫌いですか？」
「好きだよ。愛してる」

そうは言っても本当に秀一は沙月を本心から愛しているのか自分でも理解しきれない。自分は純粋に沙月のことを好きであるのだろうか？　それを頭で整理しようをすると明子の顔がちらつく。
明子には遊びのつもりだったのかもしれないが身体を重ねた秀一はそちらの部分でも明子を忘れられない。ウジウジとして情けないのは承知している。
「姫に黙っていたのは俺が一方的に悪い。それは責められても仕方ない。だけど不躾なことはしたくないんだ。姫なら分かってくれると甘えていた。ごめん」
「……」
「今回だけは目をつぶって欲しい。もうこれからは姫を困らせることはしないと誓うから」
「……私、今まで引越しが多くて彼氏とか作れなくて。それで家では気を使ってばかりで寂しかったんです。それでやっとナイトとこんな関係になれてすごく幸せなんです。このまま時が止まってくれればいいとも思っています。でも、凄く怖いんです。こんな幸せが続くことなんてないっていつも心の何処かにあって、ナイトにいいところだけ見せようとして」
「大丈夫。俺の前では自然体でいろよ。姫は姫らしくしてくれたらいい」
「……今回だけですからね」
「約束するよ」
「条件を一つ。帰ったら私に報告してくださいね」
「うん、わかったよ。姫、心配させてごめんね。もう一度謝っておくよ」
「なんども謝らなくていいです。では、明日に備えて睡眠を取られたらいいですよ」
「姫、ありがとう」
電話を切り。冴えてしまった頭を疲れさせるため秀一はネット将棋を一局指してから眠りに就いた。

二組

夜明け前、カーテンを開いてもまだ朝日の昇る気配のないころには目が覚め、秀一は辞書を引いていた。何でもこの時刻は五更といっていたらしい。『ごこう』といえば花札を連想したがあちらは光でこちらは闇である。昼休みの時間には秀一は毎日図書室へ通い本を読み込んでいる。最近は聖書を訳したものを読破したが、彼は心酔したり感心したりといった影響をうけることはなかった。

海外の訳本を賢げに読む人達がいるが原語は理解していなければ微妙なニュアンスや機微、その心情に登場人物が至った経緯というものは伝わらないのではないのかと秀一は考える。

秀一がとある有名海外作家のミステリー本を読んだ時、突然なヒステリックなセリフや謎解きにポカーンとなった経験からそう思うようになった。

まだ身支度を整えるには早いのでネットで戦国武将の経歴などを検索し脳に知識を蓄える。いま気に入りの武将は立花宗茂と石田三成である。小学校時代は秀吉が好きで、中学時代は真田信繁が魅力的であったが逸話を読んでいくと先程の二人が魅力的であった。本人ではないが高橋紹運の最後の戦などその文章を読んだだけで熱いものが込み上げてくる。

今日は真田信之の逸話のまとめサイトを見ていた。しかし真田家は濃い人間が多すぎて信繁だけ知っている人は人生を損している。

これは言いすぎだな。以前国語の先生が「釣りを知らないものは人生を損している」といったことが頭に残っていてよく思い出してしまう。いまその先生は公務員の立場を捨てて居酒屋を経営している。

ネットをしていると時を忘れてしまうため。ふと、時計に目をやったら9時を過ぎている。待ち合わせは十時でそこには美奈子と共に行くことにしている。そろそろポッチャリねずみが来る頃かな。

ピンポーン……
来客の知らせが家中に鳴り響く。
「母さん俺が出るから」
美奈子が来ると分かっている秀一は母にそう言って玄関に向かう。
ドアを開けると薄く化粧をした美奈子が立っていた。
「どう？　似合ってる？」
白を基調とした青の花柄の散りばめられているオフショルダーのワンピースを着て、肩からはベージュのメッシュポシェットを下げている。足元はブラウンのブーツで生足。
「可愛い、かわいい」
お約束の言葉を言ってあげる。
「感情がこもってないやり直し」
不機嫌な顔をしてダメ出しをされた。
「高校生なんだから何時までも可愛いは止めないか？」
「えっ？　私はかわいいでしょ」
美奈子は客観的に見ても可愛いのは紛れもない事実であるがそれを本人が言うのはなんだかなあ。と秀一は思う。
「ほら、お兄ちゃんも早く着替えなさい」
「奥さんみたいな言い方はやめろよ」
「抱いておいて冷たいこというのね」
白々しい泣きまねをする。秀一は無視して服を着替えた。
「ねえ、デート行くのにそんな格好でいくの？」
普段と変わらないチェックのシャツとジーパンの着替えた秀一に不満げに行ってくる。
「あのさ、たかが映画を観に行くだけなんだぜ。おしゃれしてどうする。それとも何か映画館は紳士淑女の社交場か？」
「試写会なんだから多少そういう面はあるんじゃない」
「俺が小奇麗にしても映画の質が上がるわけがない」
小学生みたいな事をいう。いい年をして皮肉を言う人間は知識位がある分イラッとくる物言いになりがちだ。

「私は化粧までしてきたのに」
「似合ってないぞ」
「口だけでも褒めてよ」
「口紅いい色だね」
「口だけってそういう意味じゃない」
美奈子をからかうのは楽しい。ぷっくりとふくらませた頬を見ると妙に気が落ち着くのだ。
「おばさん。訊いてよ」
振り返ると奴がいた。母親だ。
「お兄ちゃん。私をからかうのよ」
「美奈子ちゃんが好きだからよ。好きな子には意地悪したくなるの」
「こらババア」
「だって私の前で二人は婚約したじゃない」
「何年前の話だよ」
幼い時に遊びで皆の前で美奈子にプロポーズしたのはもう十年は前のことだ。
「美奈子ちゃん可愛いじゃない。モデルみたいよ」
「ありがとう」
ジョークに決まってるのに美奈子は満面の笑みになる。
「私、昔モデルのバイトしたことがあるんだから」
衝撃の過去を言い出した。秀一は初耳だ。
「だいたい秀一にはデリカシーがないのよ。ねえ、美奈子ちゃん」
「そうそうだいたい……」
「はい。そこで止め！」
例のごとく秀一の悪口大会が始まる気配を察知し秀一は割って入って靴を履き美奈子の手を握って外に出た。
「いくぞ」
「ちょっと痛い」
「俺を不機嫌にしたのは何処の誰だ？」
「どうせなら」

機嫌をそこねている秀一を無視して美奈子はベッタリと体を寄せてきた。柔らかな感触が秀一の腕に伝わってくる。
「くっつきすぎだ。自重しろ」
「照れてるんだ。お兄ちゃん」
「お前は女として見てないって何度言ったら分かるのかな」
「私巨乳でしょ。お兄ちゃんの雑誌そんな人ばっかりだったよね」
「お前この間。そんなモノまで見てたのか」
「眼鏡と巨乳と熟女と女子高生と……あとなんだっけ？」
「そういう記憶力はすごいんだな」
「だってすごい格好をした写真ばかりだったから。ＤＶＤは何処にあるの？」
「そんなモノ持ってない」
「全てパソコンの中にあるんだあ」
「お前はいつからそんなにエッチな子になったんだ？」
「あなたに抱かれたあの日から」
「面白くない〇点」
とりとめもない会話を弾ませながら二人はＴ駅まで電車に揺られる。待ち合わせは駅前の噴水である。
駅からみると噴水には進藤と弟らしき男が恋人よろしく何やら会話をしている姿が見受けられた。時刻は９時５５分。
「待たせたかな？」
秀一はまず最初にそう言葉をかけた。
「ううん、いま来たところ」
チェリーピンクのＶネックの７分袖Ｔシャツに紺のパンツにスニーカーという極めてラフな格好であるがスタイルが良いので見栄えがする。
「おい、美奈子スタイルがイイとラフな服装でもかっこいいだろう。よく覚えとけ」
「一ノ瀬君。それお世辞なの？　ありがとう。でも、美奈子ちゃんもかわいいわよ」

「ありがとうございます。先輩」
「そうそうこれが私の弟で薫」
弟は美少年ではあるがいかにも影のある佇まいをしていた。なんか親近感がわく。
「始めましてお姉さんのクラスメートの一ノ瀬と言います」
「始めまして」
「進藤くんって進藤先輩の弟さんだったんだ？」
「美奈子知っているのか？」
「だってクラスメートだよ。こんな偶然って本当にあるんだね」
薫は話をしている美奈子を見ているが何か挙動が不自然である。
（こいつ美奈子が好きなんだな。だから誘ったわけか）
「それでは二手に分かれましょう」
「えっ、四人並んだ席じゃないの？」
「うん。ペアチケット二組なのよね」
恭子と秀一、美奈子と薫の二組にわかれてペアになり映画館へ足を運ぶことになった。
前を歩いている薫が緊張でロボットのような動きになっているのがかわいそうだが笑えてしまう。
「進藤さん。映画好きなの？」
「特に好きではないわ」
「今日は弟のために一肌脱いだんだよね」
「それはノーコメント。でも私も楽しみにしていたわよ」
「俺なんかがパートナーで気が引けるな」
「一ノ瀬君は自虐的なのね」
「期待しないほうが良い結果の時儲けた気分になれるからね」
「私もタイプ的にはそっちかな」
「完璧超人の言う事とは思えないな」
「私の何処が完璧なのよ」
「怖いものなしって見えるよ」
「私って冷たく見えるのかな」

「話しかけづらい事は確かかな」
「オブラートに包んだ言い方にしてよ」
隣に並んでいるだけでいい香りが鼻腔を刺激する。隆に言ったら嫉妬されまくるだろうなと一ノ瀬は優越感に浸る。
駅から徒歩五分にある八階建ての映画館に着くと恭子は受付窓口に四枚の紙を渡し正規のチケットに変えてもらう。
「これから、二組別行動にするからね」
すたすたとエレベーターに向かう恭子に秀一は付いていった。薫と美奈子を早く二人だけにしたいからだろう。優しいお姉さんである。しかし美奈子はフクザツな心境で先に進む秀一を視界の中心に捉えていた。

相手は

「ねえ、さっきの質問に答えてもいいかな」
二人きりでエレベーターに乗っている途中に恭子は言い出した。心境の変化があったのか、元々二人きりの時にいうつもりだったのか。
「なんだっけ？」
「私が弟のために試写会のチケットを取ったのかということよ」
「そんな会話したっけ？」
「一ノ瀬君、ほんとに覚えてないの？」
「俺は言葉には感心がないから」
「いや、そうじゃないでしょ」
ポイントがズレているといった呆れ顔で秀一を見る。
「一ノ瀬君って謎多き男ね。よくわからないわ」
「執着心が薄いんだよ時々全てが虚しくなることがあって、なんというかその……変かな？」
「うん、変だと思うわ」
慰めの言葉もなく正直に返事が帰ってきた。そうしてる間に二人は映画館の席につき着席をする。
上映時間まではまだ時間の猶予があるらしく、秀一は飲み物を買ってきた。
「ありがとう。高かったでしょ」
「良心的な価格とは言えないね。まあ商売だし」
「納得するのが一ノ瀬くんらしいわ。それでねさっきのことだけどね。私男性と一度デートというのをしてみたかったの」
「それって弟さんのためじゃなく自分の為にチケットを取ったって意味？」
「そう」
「それにしても相手に俺を選ぶのはセンスがないと言わざるをえな

いね。俺は何の面白みのない男だよ」
「そこまで自虐的にならなくても……」
恭子は苦笑する。秀一は辺を見回しているが美奈子と薫を見つけることが出来なかった。
「進藤さん。美奈子たちはどこら辺にいるのかな」
恭子は、えっ？　という表情になる。
「一ノ瀬君まだ気づいていないの？」
「なにに気付くの？」
「チケットを見てみて」
言われるままにチケットに目を移すと知らない題名がそこに記されてあった。
「復活の日じゃないの？」
「看板で気づくと思ってたけど一ノ瀬くんってとんでもない天然なの？」
「いじわるだなあ。これ何の映画」
「恋愛映画よ。人を愛せない男がある事件が切掛で、自分をずっと見つめていて愛してくれていた人に気づくストーリーよ」
「ありがちなネタだね。現実でそんな都合のいいことなんか起こらない。だからこそ映画が成り立つとも言えるけどね」
「一ノ瀬君、映画好きじゃなかったの？」
「好きだよ」
「そうとは思えないこと言ってるわ」
「この映画に関してだけだよ」
「恋愛で痛い想い出があったりする？」
冗談で言ったのだろうが、胸にぐっとくる。無様に散った初恋は秀一のこころの重しになっている。
「あれ、もしかして。当たりだったのかしら」
どういう顔をしたらいいのか見当がつかない。ただ愛想笑いを適当に表してみる。
「振られたのは美奈子ちゃんだったりする」

「それはない、絶対にない」
「一つ忠告していいかな？」
「忠告？」
「そう忠告。一ノ瀬君、大事なのもは失ってから気づいても遅いのよ」
「うん、さっぱりわからない」
「いいわ。私はおせっかいする義理もないし。私を恨まないでね」
秀一は恭子がなにを言いたいのか皆目見当がつかない。
「私は、欲しい物は必ず手に入れてきたの」
「進藤さんの真意が汲み取れないよ」
「それなら、この際はっきりいうわ。私は美奈子ちゃんが好きなの」
「好き？　愛してるってこと？」
「ええ、その通りよ」
「それはまずいよ」
「なにがまずいのかな。好きな人が欲しいのは本能でしょう」
「本能というのなら異性にその気持が向かうはずだ」
「一ノ瀬君はそういうと思った」
「俺じゃなくてもそう云うさ」
「つまらないわね。倫理とか道徳とか既存の価値観を後生大事に守って何の得があるの？」
「俺だってそんなに硬い人間ではない……もしかして美奈子に告白をしたのは進藤さんだったの？」
「そうです。それで良い返事をいただきました」
美奈子が相手のことを全く言わなかった理由が氷解した。しかしあの時秀一がきちんと聞いていれば美奈子は言うつもりだったのかもしれない。秀一は美奈子の様子がいつもと違うことを知りながら、まっすぐに向き合わなかった自分が愚かに思える。
「美奈子ちゃんは一ノ瀬くんに何も言ってなかったというわけね」
（いや違う。俺があいつのシグナルを受け止めてやれなかったんだ）
「告白をされたのは聞いていた。でもそれが進藤さんだとは聞いて

いない」
「一ノ瀬君、後悔してない？」
『後悔』この言葉をどう消化したらいいのか秀一は考える。恭子が美奈子の付き合っている相手だと分かっていれば止めたのだろうか。それとも一つの愛の形として認めただろうか。自分の気持がどこに有るのか？　見知らぬ虚空を漂っているようなふんわりとした奇妙な感覚が背中を伝う。
「美奈子が幸せならいいんじゃないかな」
当たり障りなく言う。
「それ本心？　美奈子ちゃんのことどう思っているの？」
「これまでさ何回言ったのか自分でも知らないけどあいつは妹みたいなものなんだよ」
「それなら私は好きにさせてもらいます」
場内が暗転しスクリーンに映像が流れ始めた。

二時間後、映画が終わり二人が外に出ると、先に出ていた薫と美奈子が寄ってくる。
「お兄ちゃん遅いよ」
「ごめんごめん」
「何処の席に座っていたの？　わからなかった」
「俺は気付いてたけど」
違う映画を見たことは黙っておくことにした。しかしまさか美奈子の相手が恭子とは想像しようがない事象である。本人の口から出るまで秀一は聞かないでおくと決めた。
「俺は用事があるから」
そう言って秀一は家路につく。これは館内で恭子と打ち合わせしていたことで、これから恭子は美奈子をカラオケに誘うつもりだと言ってきたのでそれなら俺は帰るということになった。

報告

家に着き、部屋に戻ってもまだ昼を過ぎたあたり。太陽は粛々と地を照らしている。秀一はすることもなくベッドに横になり、一つ大きく深呼吸をした。

まさか美奈子の相手が恭子だったとは、想像がつくはずもない。嫌悪はないが、わだかまりは認めるしかなく釈然としない気持ちは胸のうちに明らかに芽生えている。

「ふう」

ただのため息がやたらと耳に響いてノイズのようにいらだちを覚えさせる。

「なに気が立ってんだ俺は」

手に取った文庫本を数ページ開いただけで放り投げる。秀一は自分が利用されたことに腹を立てているわけでもなく折角の休日の時間を奪われたことに憤っているわけでもない。確かで明快な理由がないのに苛立っている。

「落ち着け、落ち着け」

と自分をなだめようとしても折り合いがつかない。秀一は起き上がり風呂場でめいいっぱい熱いシャワーを浴びる。熱い湯に身体を委ねると少し落ち着きを取り戻すことができ、沙月に報告義務があったことを思い出して彼女に電話を掛ける。

「ナイト、もう終わったの？」

沙月は夕方辺りに電話が来ると算段していたらしく驚くように言う。

「映画を観に行っただけだからね」

「食事もなさらなかったんですか？」

そう言われて見れば昼食を取っていない。

「俺は利用されただけだから」

「利用？」

「進藤さんはデートを一度してみたかっただけだってさ」
「そういうことでしたの」
「そういうことでしたよ」
「ナイトは不満そうね」
「不満なんかないよ」
「声が苛立っているようですけど」
「気のせいだよ。姫」
「もしかして進藤先輩に好意を持っていたんですか？　怒りませんから正直に言ってください」
「そんな気持ちは一ミクロもないね」
「本音を言っても私は怒りませんよ。私はナイトを愛していますから。私の彼氏であればそれでいいんです」
「テレサ・テンの歌の歌詞みたいだね」
「誰ですかそれ？」
「昔の歌手なんだけどね」
「どんな歌詞なんですか？」
「教えない」
「姫に隠しごとをするおつもり。無礼者……と言ってる間にパソコンで調べましたわ」
　こんな軽口を言ってくれるまで結構かかった。
「姫は愛する人の全てを知りたいかな」
「知りたいわ。ナイトのことなら全てを知りたいですわ」
「俺は全てを知りたいとは思わないんだよな」
「どうしてです？」
「すべてを知ると飽きるような気がするんだよな」
「それはその人を愛していないからです」
「そういうものかな。そうだよな。俺何言っているんだろうね」
「ナイト、おかしいですよ」
「俺は元から自虐的な男だよ」
「違います。自虐ではなく落ち込んでいるようですわ」

「落ち込んでる？　なんというか、いまの自分の気持を上手く口に出せないんだよね」
「美奈子ちゃんと何かありました？」
「……特に何もなかったよ」
　美奈子と恭子のことを沙月に言えるはずもなくそう言うしかない。
「間が開いたのが気になります。ナイトは美奈子ちゃんのことを話すときはイキイキとしてますからね」
「あいつは天然で一緒に居るだけで面白いハプニングに出会えるからね」
「ナイトとお似合いです」
「ちょっ、何言い出すんだ。俺は君の彼氏だろ」
「私、というよりもナイトを知っている人なら美奈子ちゃんがナイトに好意を持っていることくらい分かります」
「やめてくれよ。姫の方こそおかしいよ」
「私がおかしい？　だってナイトは私にデートすら誘ってくれないですから」
「埋め合わせはきちんとすると約束しただろう」
「ナイトは私のこと好きではないんではないですか？」
「好きに決まってるじゃないか」
「私と出会ったのはつい最近……だけど美奈子ちゃんは昔からナイトのことを知っている。正直に言って羨ましいです」
　秀一の負の感情が連鎖したのか沙月の声が涙声になっている。
「ナイトは紳士的すぎて……私が女として魅力がないんではないかと思うことがあるんです」
「姫は魅力的だよ。だけど俺たちは節度のある付き合いをしたいと考えているんだ。姫はお嬢様みたいだから。親御さんもそれを望んでいるだろうし」
「親とかは関係ないです。私とナイトがあくまでも付き合っているのですよ」
「大切な恋人だから姫を大事に扱っているんだよ。俺は君を愛して

いる」
「言葉ではなんとでも言えます。ナイトは偽善者だわ」
沙月の口から人を批判する文言を聞いたのは初めてだそれも秀一のたいして。お互いに感情的になっている。
「姫は俺に不満があるのかな。それならいつでも別れていいよ」
売り言葉に買い言葉ではないが、このうっかり発言はさすがにまずいと秀一は悔いたがもう言葉にして空気を振動させてしまった。
「ほら、そうじゃないですか。ナイトは私のことなんて好きではないんです」
「ごめん。いまの言葉は俺が悪かった」
「とっさに出るのが本心ですわ。それが聞けてよかったです」
沙月は相当機嫌をそこねている。口論をしたことが一度もなかった二人の関係はおままごとだった。
「だから、謝っているじゃないか。姫は意外と頑固なんだね」
「今頃気づいたんですか？　私のこと感心がない証拠です」
「そんなことない。信じてくれよ」
「信じません。御機嫌よう」
沙月が一方的に電話を切ってしまった。その後なんども秀一は彼女にかけ直したが出てはくれない。ただの一言がよほど気に触ったのか、日頃の積み重ねが爆発をしてしまったのか……。
秀一は自分の気持を改めて整理してみる。沙月は……ファーストの女性ではない。ファーストは明子であってその地位は揺るがない。ではセカンドなのか？　というと美奈子の顔が邪魔をしてくる。
「なんでお前が出てくるんだよ」
と虚しい独り言。分からない。沙月は美人で性格も良く文句の付け所はない。しかし愛しているか？
となれば口では愛を謳ってきたものの実感はそれほどない。好意はあるのに彼女を何としても自分のものにしようと意地にはなれない。
「俺は明子姉ちゃんしかだめなのか？」
人妻を諦めきれない。物心ついた時からの憧れを否定する勇気を

持てない。明子は遊びのつもりでも抱いた身体は忘れられず、性欲を処理するときには明子との情事を記憶に呼び起こしてしている。
昔からの……また美奈子の顔が今度は笑顔で脳に浮かんだ。
「だからお前はなんなんだ」
一人で見えないものにツッコミを入れる。たいして使っていない頭が疲れてきた。
「もう一度、姫に謝ってみるか」
携帯を取り出すと着信が入っている。相手は……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6029t/

十二支の恋人　ねずみ編

2011年6月27日09時55分発行